

## ミャンマー訪問団報告

「一つになれない国」の苦悩と希望

ミャンマー訪問を終えて

訪問団長 稲葉 康生

日本労働ペンクラブと日本ILO協議会の共催で、9月6日から12日までミャンマーを訪問した。労組、農民組合のリーダーや経済団体など10数諸団体との意見交換や交流を行い、3大仏教遺跡群がるバガンでは見事な寺院などを見学、イラワジ川の洪水被害の現場も見てきた。ミャンマーの現実をこの目で見て、人々との交流を通じて得たものは大きかった。

ミャンマーは2つの顔を持つ国だ。「一つになれない国」、そして「苦悩と希望が輪廻する国」である。短い滞在期間だったが、多くの人に会い話を聞きながら、そう感じた。

「一つになれない」背景には、軍政と民主化を求める民衆の対立があり、もう一つは多数を占めるビルマ族と少数民族の歴史的な対立抗争が今も絶えないからである。

「苦悩と希望」を繰り返すのは、この国の宿命なのだろうか。1948年に英国から独立し議会制民主主義の国として再生を図ったが、国軍クーデターで長く軍事政権が続いた。88年、学生や市民らが民主化に立ち上がったが、これも抑え込まれてしまう。

こうした民主化へのうねりの中で、アウンサン・スーチー氏が登場、総選挙が実施され国民民主連盟（NDL）が圧勝する。だが、軍事政権はこの選挙結果を無視し、スーチー氏の自宅軟禁措置を取り、民政化の道は遠のく。内外から軍政批判が噴出しスーチー氏の軟禁が解かれ、2011年3月に念願の民政移管が実現した。とはいえ大統領と与党指導者は軍のトップが占め、事実上の軍事政権が続く。

文字通り「苦悩と希望」の繰り返した。国民の多くが信じる仏教の言葉で言えば、「輪廻」ということになる。

軍政の経済政策はうまくいかず、暮らしは一向によくない。労働者の賃金は長時間残業代を含めても日本円換算で月額1万円を得るのがやっと。農村部では「若者が海外への出稼ぎを余儀なくされている」と聞いた。

私たちは総選挙が始まったヤンゴンやバガンをバスで回ったが、日本のような選挙戦の光景を見ることはなかった。労組のナショナルセンターであるミャンマー労働組合総連合への取材で、マウンマウン会長は「総選挙では政党の支持はしない。誰が勝つても（軍政に）戻ることはできない」と話していた。「一つになれない国」ミャンマー。11月の総選挙の後、人々は今度こそ、変わらぬ希望の光を見出すことができるのだろうか。



ミャンマー大使館前の訪問団